

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この段の山は「なみ＝地震」などの古語、丁寧語「侍り」と過去の「き」、「こそ～しか」の係り結び、そして「時がたてば人は忘れる」という結びの主題です。

あらすじ＝元暦二年（一一八五年）、都をおそった大地震のようすを、鴨長明が自分の目で見たままに書きとめた段。山は崩れて川を埋め、海は傾いて陸地をひたし、大地は裂けて岩は谷へ転がり落ちる。都の堂や塔は一つとして無事でなく、家の中にいても外へ走り出ても逃げ場がない。羽もなく龍でもない人間には、ただ地震こそが恐ろしいと長明は思い知る。土塀のおおいの下で遊んでいた武士の幼い一人っ子が押しつぶされて死に、両親が声もはばからず泣き悲しむ場面では、勇猛な武士でも子を失う悲しみには恥を忘れるのだと、長明はいたわしく見つめる。余震は三か月ほど続いたが、年月がたつと、その地震を口に出して言う人さえいなくなった。人の心のはかなさを嘆いて、この段は結ばれる。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

また、同じところとかよ、^①おびたたく大地震（おほなる）ふること^②侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、^③海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ちどを惑はす。

都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、^④一つとして全からず。あるいは崩れ、あるいは倒れぬ。塵灰立ちのぼりて、^⑤盛なる煙のごとし。地の動き、家の破るる音、雷にことならず。家の内にをれば、たちまちにひしげなむとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、^⑥空をも飛ぶべからず。^⑦龍ならばや、雲にも乗らむ。^⑧おそれのなかにおそるべかりけるは、^⑨ただ地震なりけりとこそおぼえ侍りしか。

そのなかに、あるもののふのひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を造り、^⑩はかなげなるあとなしごとをして遊び侍りしが、にはかに崩れうめられて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、父母かかへて、声も惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、^⑪あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみには、^⑫たけき者も恥を忘れけりと覚えて、いとほしくことわりかなとぞ見侍りし。

^⑬四大種のなかに、水・火・風はつねに害をなせど、大地に至りては、ことなる変をなさず。

昔、斉衡のころとか、大地震ふりて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじきことども侍りけれど、なほこのたびには^⑭しからずとぞ。

かくおびたたくふることは、しばしにてやみにしかども、そのなごり、しばしは絶えず。世の常、驚くほどの地震、二、三、十度ふらぬ日はなし。十日、二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、あるいは日に四、五度、二、三度、もしは一、二、三、二、三日に一度など、おほかたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。…月日重なり、年経にしのちは、^⑮ことばにかけて言ひ出づる人だになし。

語注 おびたたく＝程度がはなはだしい。ものすごい。大地震（おほなる）＝大きな地震。「なみ」が「地震」を表す古語。ふる＝（地震が）起こる。揺れる。世の常ならぬ。ふること＝ふつうではない。尋常でない。まろび入る＝転がり落ちる。立ちど＝足を置くところ。足場。在々所々（ざいざいしよしよ）＝あちこち。いたるところ。常言（だうしやたふべう）＝お堂・塔・みたまや。寺社の建物。全（また）し＝完全である。無事である。ことし＝このようだ。雷（いかづち）＝かみなり。ひしげ（ひしげ）＝押しつぶす。／（下二段・自動詞）つぶれる。押しつぶされる。本文の「ひしげなむとす」は下二段の連用形「ひしげ」で、「な」は完了「ぬ」の未然形「む」は推量。今にも押しつぶされてしまいうさだ、の意。もののふ＝武士。築地（つひぢ）のおほひ＝土塀の上にかけた屋根のようなおおい。あとなしごと＝あとに残りなない、たわいのないこと。ここでは子どもの遊び。うちひさぐ＝押しつぶす。たけし＝勇猛だ。気が強い。ことわりかな＝もつともなことだ。四大種（しだいしゆ）＝仏教で、万物をつくっていると考えられる地・水・火・風の四つ。斉衡（さいかう）＝平安時代の年号（九世紀なかば）。御首（みぐし）＝お頭（あたま）。しかず＝及ばない。かなわぬ。なごり＝あとに残るもの。ここでは余震。間遠（まどほ）＝間隔があくこと。一日（ひとひ）＝一日おき。だに＝くさ。鴨長明＝『方丈記』は写本によって語句に少しづつ違いがある。この段は、長明が自分で体験した五つの大きな災いの最後にあたる、元暦二年（一一八五年）の大地震の記録です。※『方丈記』は写本によって語句に少しづつ違いがあります（「同じころかとよ」とする本もあります）。お使いの教科書の本文に合わせてください。※本文中の「…」は、この記事で本文を一部省いたしです。記事の本文は読みやすいように区切って並べています。教科書とは段落の切れ目や並び方がうかがうことができるので、位置を確かめるときはお使いの教科書の本文で見てください。

A 語句の意味と読み (1～7)

- (1) ① 「おびたたしく大地震（おほなる）ふる」の「おほなる」の読みを現代仮名遣いで書き、意味も書き。
- (2) ① 「おびたたしく大地震（おほなる）ふる」の「ふる」の意味を書け。
- (3) ① 「おびたたしく大地震（おほなる）ふる」の「おびたたし」の意味を書け。
- (4) ④ 「一つとして全からず」の「全し」の意味を書け。
- (5) ⑩ 「はかなげなるあとなしごと」の意味を書け。
- (6) ⑫ 「たけき者も恥を忘れけり」の「たけき」の意味を書け。
- (7) 昔の大地震について「なほこのたびには⑭「しかず」とぞ」とある。⑭「しかず」の意味を書け。

B 文法 (8～13)

- (8) ② 「侍りき」の「侍り」を文法的に説明せよ（品詞・活用形・敬語の種類・働き）。
- (9) ② 「侍りき」の「き」の文法的意味と活用形を書け。
- (10) ③ 「海は傾きて陸地をひたせり」の「り」の文法的意味・活用形と、何形に接続しているかを書け。
- (11) ⑥ 「空をも飛ぶべからず」の「べからず」の意味を書け。
- (12) ⑨ 「ただ地震なりけりとこそおぼえ侍りしか」から係助詞と結びの語を抜き出し、結びの活用形も書け。
- (13) ⑮ 「ことばにかけて言ひ出づる人だになし」の「だに」の意味・用法を書け。

C 主語・指す内容・敬意の方向 (14～17)

(14) ②「侍りき」の「侍り」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(15) ⑦「龍ならばや、雲にも乗らむ」とあるが、「雲にも乗らむ」と思っているのは誰か。

(16) ⑧「おそののなかにおそるべかりけるは」の「おそののなか」には、何の中のことか。

(17) ⑪「あはれにかなしく見侍りしか」とあるが、「見」たのは誰か。

D 口語訳 (18～21)

(18) ③「海は傾きて陸地をひたせり」を口語訳せよ。

(19) ④「一つとして全からず」をふくむ「都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず」を口語訳せよ。

(20) ⑦「龍ならばや、雲にも乗らむ」を口語訳せよ。

(21) ⑮「ことばにかけて言ひ出づる人だになし」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ⑤ 「盛りなる煙のごとし」は、何のようすを何にたとえたものか。説明せよ。

(23) ⑫ 「たけき者も恥を忘れけり」とあるが、どういうことか。説明せよ。

(24) ⑬ 「四大種」をふくむ一文で、長明は何を言おうとしているのか。「四大種」の語の意味にもふれて説明せよ。

(25) ⑮ 「ことばにかけて言ひ出づる人だになし」には、作者のどのような考えが表れているか。この段の主題にふれて説明せよ。

F 文学史・思想 (本文全体をふまえて答える) (26～28)

(26) この文章の出典『方丈記』の作者名と成立した時代を書け。また、『枕草子』『徒然草』とあわせて何と呼ばれるかも書け。

(27) ⑬ 「四大種」は仏教の考え方にもとづく語である。その読みを書け。また、この語が示すように、『方丈記』全体を貫くものの見方を漢字三字で書け。

(28) 『方丈記』の前半で、作者は自分が体験した五つの大きな災いを順に語っている。この「元暦の大地震」はその最後にあたるが、残る四つを書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「なる」は地震。①「おほなる」＝大地震、「ふる」＝（地震が）起こる。読みと意味の両方を書けるようにしておく。②「侍り」は尊敬ではなく丁寧。②の「侍り」は作者から読者への丁寧語。⑨の「こそ～しか（已然形）」の係り結びもセットでねられる。③主題は「地震の恐ろしさ」＋「忘れてしまう人の心」。記述の答えは⑮に集まります。災害の描写だけで終わると減点されやすい。